大江　晃先生を偲んで

野本和幸

大江晃先生は、昨冬二〇〇五年二月八日、忽然と私たちの許から去って行かれました。ご享年七九歳。ご病勢の進んでいることを全く知らなかった私たちは、奥様からのお電話に、唖然とし、茫然自失、暫らく言葉も出ませんでした。はや一周忌も近づいてきた昨今でさえ、なお私には先生が去っていかれたことを信じかねています。以下は、慶応大学文学部哲学科・創価大学文学部人文学科有志共催で、都ホテル東京で行なわれた「大江先生を偲ぶ会」（二〇〇五・三・一六）でお話したことを、一部省略し、奥様から伺ったことをいくらか補足しながら、やや個人的なことも交えて、記させて頂きます。（なお正式の経歴・業績などの紹介は、既に先生の創価大学ご退職記念『人文論集』13号（二〇〇一）に、林俊雄氏が記しておられますから、簡略にさせて頂きます。）

さて、ご実父大出俊夫氏は東京帝大医科大学外科ご出身で塩田外科の医局におられ、腕がよく、両手が同じように使えたということです。池上のご邸宅からわざわざ蒲田撮影所近くに開業された蒲田病院は、撮影中に怪我をした俳優さんたちはじめ、有名女優さんたちも来院されて、随分はやっていたと伺っています。先生のご長兄は内科医、ご次兄は外科医、ご令弟は生物学者、東大海洋研究所の理学博士です。それで、大江先生が文系を選ぶに当っては、大分ご尊父には逆らったということであります。一方、ご実母のご令兄は高名な児童文学者、小出正吾氏であられましたから、文系の血筋でもあったといえるのかもしれません。母方は無教会派のプロテスタントのように伺いました。蒲田時代のことについては、奥様にも「結構いい子」だったことしか言われなかったそうですが、既にこの頃から先生の親しい遊び友たちで大森山王のご大家のお坊ちゃまであられたという森岡先生にお伺いした方がよいかもしれません。「やまひさ」の酒席で、お二人が時に「親父たちが場所通しで予約していた大相撲の升席じゃ、足が痺れてよー」とか、巻き舌の江戸弁で、楽しそうに昔噺をされていたのを思い出します。また慶応の文学部学部長選挙で、詩人の西脇順三郎氏は断るに違いないと一同信じ込んで、しかし長老には敬意を表し（いわば当て馬として）、みなで投票し目出度く当選となったところ、なんとご快諾されるに及んで、みな唖然とし、「びっくら仰天」周章狼狽し、前後策を講じるにも既に遅しで、「あんときは本当に、たまげたなー。しかも、西脇先生御大は、散髪させ

つつ慶応の床屋に、今度は学部長に選挙されるかもしれん、と意欲満々だったてんだよ。床屋しか、事前に知らなかったんだよ、まったくまいったなー。」と可笑しそうに、大笑いされていただご様子が今でも目に浮かびます。

さて、大江先生は、戦後早期に渡仏留学生としてパリやベルギーで本格的に論理学・科学哲学を学ばれ、以来その分野での日本のリーダーとして、長くわれわれ後進に進むべき道を示してこられました。フランス留学は一九五二年～五五年で、遠藤周作氏は、慶應大学倫理学の三雲夏生先生といっしょに、既に一九五〇年に渡仏されていました。このお二人はリヨン、先生はパリでしたので、いつもいっしょというわけではなかったようです。ソルボンヌではデ・トウシュ教授にお世話いただいたそうです。アンリ・ポアンカレ研究所でも研究されました。コレージュ・ド・フランスでは、メルロ＝ポンティの講義も聴いたよと、いつかおっしゃっておられました。遠藤氏の帰国するのを見送った話を、奥様はよくお聞きになったそうです。（これにはちょっとした秘話があるそうです。）加藤周一氏も同時代の留学生でした。また森有正氏も同時期に留学中で、同様に窮乏生活を送っておられた由。いつか「苦悩が外套を着てパリを歩いているようだった」と話されたのを覚えています。

一九五五年～五六年にはベルギー・ルーヴァン大学哲学研究所に移られました。奥様によると、パリからいったら田舎でつまらなかったという話ばかりきかされたそうです。しかし当時も現在も、ルーヴァンは、論理学・数学の哲学では、高水準の伝統を保持し続けている著名な研究機関で、「とにかく勉強以外に何もすることがなかったよ」といつか苦笑しながら言われていたので、むしろここで先生は生涯の学問の基礎を固められたのかもしれません。

先生は、カトリック修道院の寮に居住され、週に一度炊事当番がまわってきたそうで、それなりに料理をつくり、皿のかたづけもされたそうです。当番は二人で、助手役だったようですが、「みんながおいしいといって食べるとほっとした」と言っておられたそうです。後年、時に先生自身が手作りの料理をご馳走くださいましたが、その下地はこんなご経験にあるのかもしれません。ルーヴァンで京大卒、後に阪大理学部・北大工学部教授で高分子学会賞などを受賞された、林晃一郎氏と親友（ポンユウ）になられ、その交わりは林教授が亡くなるまで、パリでまた帰国後も東京、札幌と、ご家族ぐるみの数かぎりないご交友の歴史がおありだそうです。そうしたパリ時代の留学生仲間の人々も、加藤周一氏をのぞいては、ほとんど亡くなられたということです。

その後一九六六年～六七年バーヴァード大学エンチェン研究所訪問研究員のときに、クワイン教授が、

『集合論とその論理』（の改訂版用）の講義のはじめに、毎週のように改定された原稿を「ハイ、オオエさん」といって渡されるのを仮寓に持ち帰り、既に岩波に初版の翻訳原稿を渡して来たのを、岩波が快く改訳に応じてくれるというので、改訳に当られました。それが意外に早期に岩波から出版（一九六八年）されて、クワイン教授から原著改訂版（一九六九）より日本語版の方が早かったと言っていただいたと、喜んでおられたそうです。この時はご家族同伴でハーヴァード滞在を楽しまれたようでした。後年稲盛財団の京都賞をクワイン教授が受賞されましたが、その選考に尽力されたのも、大江先生でした。滞米生活の終わり頃に皆が困るのは車の処分なのですが、ドアの開閉具合がいまひとつだったので、心配したが、大江先生ご自身で最後に丁寧にドアを閉めて差し上げて無事、売買が成立、ヤレヤレだったと、愉快そうに話されていたことも思い出されます。

ご帰国後、慶応義塾常任理事（一九六九―七三年）を勤められた後、一九七七年には、半年間、慶応義塾派遣留学で単身パリにいかれ、そのときにお仕事をまとめる時間の余裕がお出来のようでした。質素なホテルに滞在されたそうですが、先の留学生時代に較べれば、食事やワインもお楽しみになれたそうです。その夏は奥様も休暇に入るとすぐにご子息の知夫さんと出かけられて、車でノルマンデーへ、またプロヴァンスのあたりまで足を伸ばされたそうです。帰国後は次々に要職に着かれ、長期の外国滞在はそれが最後とならし

れました。

主なご要職を列挙しますと、慶応大学情報科学研究所長（一九七九―八一年）、同図書館長（一九七九―八五年）、同文学部長（一九八五年―八七年）。このご多忙中の一九八二年には、博士号をとられています。若くして大人の風格のおありだった先生は、また早くから学会での要職に着かれ、科学基礎論学会理事長、日本哲学会委員、日本科学哲学会理事として学会のために長年尽力され、基礎論学会、科学哲学会の名誉会員であられました。

主要著作としては『日本語と論理』（講談社、一九六五）、『論理の探究』（慶応通信、一九八〇）、『自然な推論のための論理学』（勁草書房、一九八九）、『パラドックスへの挑戦』（岩波書店、一九九〇）、『知識革命の系譜学』（岩波書店、二〇〇四）等々、主要翻訳としてデカルト「精神指導の規則」（『デカルト選集4』、白水社、一九七三）、クワイン『集合論とその論理』（岩波書店、一九六八）、同『ことばと対象』（勁草書房、一九八四）、ホワイトヘッド『数学入門』（松籟社、一九八三）、エラスムス『痴愚礼讃』（慶応大学出版、二〇〇四）等々を出版されました。こうした著作を通し、論理については、日常的な推論に近い形の、直観主義論理と古典論理の中間のシステムを展開され、広く公理論的方法、自然演繹、ゼクエント算、タブロー、モデル論といった現代論理学の諸方法を関連付けつつ、量子論理については線形論理の枠組み中で、ゼクエ

ント算による独自の形式化を与えられました。また20世紀初めの集合論、意味論的パラドクス、量子力学上のパラドクスとその克服のダイナミズムについて、見通しのよい解説を遺されました。

私がはじめて大江先生とお会いしたのは、一九七三年春の日本哲学会においてでありました。その日私は現代論理学の創始者フレーゲについて講演しましたが、会場はシーンとし、質問なしでお終いでした。故中村秀吉さんや大江先生たちが大変同情して下さり、日哲ではまだ無理だな、まあ飲みに行こうやと誘ってくださいました。（この講演には岩波の『思想』編集者が関心をもってくれ、翌年同誌に掲載されました。）以後、京都からきて、水戸でひとりでやっている私を見かねてか、大江先生の研究室で一月一回行なわれていた「言語と論理の会」に入れてくださいました。この会は、中村秀吉、大江晃、吉田夏彦、坂本百大、坂井秀寿、藤村龍雄といった当時の分析哲学系中堅の錚々たるメンバーが、舞台裏を曝して発表し、忌憚ない批判をしあうという会で、一番の若手が私と西山佑司さん（大江先生のお弟子で、現慶応大学言語文化研究所教授）でした。在外経験の豊富な先輩たちばかりで、その会とその後の飲み歩きで随分いろいろ海外情報を聴くことができました。晩くなって水戸に帰れなくなり、とうとう大江先生宅のソファで一晩寝てしまったこともありました。

以後、一九七六年の科学哲学会「様相論理のシンポジウム」、あるいは日本哲学会で（当時、委員をして

おられた大江先生から）特別報告をするようにというお手紙を、一九八〇年欧米留学中に頂いたり、また海外の学会等で発表するたびに、「この原稿もらったよ」といわれて *Annals*（科学基礎論学会欧文誌）に掲載してくださるなど、学会へのデヴューを計ってくださいました。

またハノーヴァー、フィレンツェ等、海外の学会で先生ご夫妻とご一緒することも何度かあり、特にご夫妻でフィレンツエのレストランに私たち夫婦をお招き下さり、ワインを傾け歓談したことは今も鮮明に思い出されます。われわれ夫婦がスイスと境を接する中世からの旧都コンスタンツに一九九一～九二年に二度目のドイツ滞在中、パリ周りではるばるわれわれの大学宿舎をご夫妻で訪問くださったことがあります。先生にフランス・ワインなど出す勇気はないので、ボーデン湖だけで獲れる魚のフライやイタリヤのキャンティ・クラシーコ、バルバレスコ、南ドイツ・バーデン-ヴュルテンベルクのコンスタンツ、メールスブルグ地物赤ワインなどを差し上げましたが、上機嫌でいられたご様子が今でもありありと浮かびます。もっともそのとき大失敗もやらかしました。ボーデン湖畔はドイツでは避暑・避寒地として有名で、湖上に張り出したホテルは田舎にしては法外に高いのです。そこで町なかの広場に面したとあるホテルをリザーヴいたしました。先生が「野本くんはよく気がきくな」と笑われるので、「何がですか」とお尋ねすると、ホテルの隣は「アダルト・ショップだぜ」。ドイツではその種のお店は、表向きはちょっとそれとは分らないので、気

がつかなかったのです。その折り、奥様の運転でボーデン湖の対岸スイス領ザンクト・ガレン博物館に美麗な聖書古写本を見に行ったり、湖畔に点在する、美術通には著名な、修道院の珍しい壁画等を、ミシュランの案内書を片手に、逆にご案内いただいたりしました。また当時スイス・ベルンに開館したばかりのパウル・クレー美術館に連れて行って下さいました。先生は特愛のクレーのみ（ご著書『パラドクスへの挑戦』には、ベルン美術館所蔵のクレーが数点、収められています）を集中して観られた後は、その感動を噛みしめるがごとく、ご夫妻とも黙然とイスに腰をおろして、われわれがガサガサ他の画家の作品も見て廻っているのを、じっと待っておられました。その折りベルンのホテルに車で入る路がひどく複雑で、いつものように先生のナヴィゲイター、奥様の運転で、実に辛抱強く試みること数度でようやく成功しました。（もっとも知夫さんによると、喧嘩にならないのは稀なケースで、きっと二人とも本当に路が分らなかったのだろうということです。）

北大在任中に集中講義においで頂いたことがあります。寒いところには冬行かねば、と言われて、わざわざ真冬にやってこられました。先生の学生でなかった私には、その一週間が先生のご講筵に連なりえた最初で最後の機会でありました。先生の博士論文のエッセンスのご紹介と思われますが、量子論理をゼクエント算形式で展開される極めて厳密で刺激的なものでありました。恒例に従って、同僚たちも含めて、毎晩スス

キノで飲み歩き、講義終了後合流された奥様ともども、当時助手をしていた金子洋之君（現専修大教授）の案内で、雪の小樽、そして名物の暖かいお寿司を満喫して頂いたものです。ススキノに慶応哲学科の卒業生が割烹をやっているから行ってみようと云われ、予約なしに訪れました。案の定大変な混みようで、しばらくお待ちをということになり、近くの喫茶店で待つこと二時間、私ならとても耐えられないほどに感じられる長い時間を、ご夫妻は時計もみず、身じろぎもせずに、じっと待っておられました。信を置いて一度決めたら泰然自若として結果を待たれる不動の姿に、私はいたく心打たれました。

この北大集中に来札されたおり、先生から「これはもう慶応の同僚の了承を得たことなのだが、私の後任として慶応に来てくれないか」という、驚天動地のようなお話がありました。大変名誉なことでしたが、これはまた非常な重責です。「身に余るお話で、有り難い限りですが、しばらく時間のご猶予を」とお願いしました。まだ北大に来て三年目位で、それ以前にも京大の恩師から非公式の打診を受けており、また東京都立大も移転に当っての改組でどうしてもマル合（博士課程担当）教授が要るといった招請、そしてもちろん北大は来たばかりで直ぐの転出は困るということで、本当に窮してしまいました。一年間悩み続けましたが、結局、北大にもうしばらくいることにしよう、そしてフンボルト財団からの再招聘を受諾して、一年間ドイツ・イギリスに行こう、と決心しました。こうして先生の面目を失わせ、ご好意を仇で返す、全く身のほど

知らずの仕打ちでしたが、ついにご辞退のお手紙を差し上げたのでした。（幸い、その後慶応大学では、愛弟子を含め、もっと若い優れた研究者たちを迎え、国際的にもよい研究が進められています。）

ところが、その後家族の体調悪化など思わぬ事態の急変が続き、また都立からの招請は益々急を告げ、結局、先生にお断りをした、その2年後には都立大への転出を決心しなければならない状況となってしまったのでした。先生からは、「死んだ児の歳は数えず」というお怒りのご返事を頂き、これで破門だと覚悟しました。

このように、恩を仇で返すご無礼を働いた者であるにもかかわらず、私たちが北大から東京に移ってくると、先述のように、ドイツ滞在先まで訪ねてくださり、また何事もなかったかのように、毎年新年会にお招き頂いて、奥様の、ときには先生ご自身の心尽くしのお料理を頂き、ワインを傾けつつ歓談の輪に加えて下さったご寛容と赦免を私はどんなに心中深く有り難く感謝しているか、言葉には言い表せません。何時のことだったか思い出せませんが、一緒にお酒を傾けつつ、先生が、こころおきなく気持ちよくお酒を酌み交わせるのは、人生に多くはないんだよ、とフト洩らされた謎のような感懐のお言葉が、時折、リフレインのように響きつつ蘇ります。

さて創価大学に移られてからの大江先生は、考古学の重鎮加藤九祚先生、また森岡敬一郎、中山浩二郎、藤村潤一郎、池田温といった錚々たる慶応・東大の名誉教授方とともに、哲学と歴史の十四名で構成される新興の文学部人文学科の育成に努められ、その間「人文学会」を立ち上げ、会長も勤められました。やがて大学院文学研究科人文学専攻博士課程の創設にも当られました。そして何と都立大を停年前に切り上げて創価に着任するように、一〇年勤めたが、まあ心配はないからと、お招きを頂きました。これには本当に驚き、また先生の温情に、二度と先生の信頼を裏切ってはならないと、心から感謝してお受けいたしました。けれども、定員削減で中山・大江両巨人退職後一人の後任で、私のとても負いうる重責ではなく、優れた中堅同僚たちの驥尾に付して、辛うじてその職責の一部を果たしているにすぎません。ところで着任後初めて、人文学会の機関誌『人文論集』を拝見し、本当に驚嘆しました。先生は、この『人文論集』に一〇年に亙って論文を掲載され続けられておられたのでした。それが今回の岩波書店刊の大著『知識革命の系譜学』（二〇〇四年、三五〇頁）の基礎となったものです。

この大著で先生は、古代メソポタミア、バビロニア、エジプトから説き起こされ、ギリシャで成立しローマ、中世を経て受け継がれる正統的知識観を「過去指向」の知と称され、近代的な「未来指向」の知識観、「仮説演繹的」方法は、ガリレオ、ニュートンではなく、むしろ17世紀パスカルにおいて確立された、とい

う独自の見解を提出されておられます。

先生は、自家薬籠中の論理・数学・科学哲学の学殖に加えて、近代語は無論のこと、松本正夫・井筒俊彦両先生直伝のギリシャ・ラテンの古典語の素養を駆使して、この広範遠大な領野を、可能な限り原典から直接説き起こされています。古典への素養と厳密な数理的才能の瞠目すべき合体は、残念ながら、今後も当分わが邦の学界で（のみならず、ヨーロッパでさえ）後継者を期待できない全く稀有なことであります。

それは、（渡辺一夫訳が仏訳からの重訳であることに気づかれて）、やはり最後のご訳業となったエラスムス『痴愚礼讃』のラテン語原文からの翻訳（三〇〇頁）にも顕著であります。しかし先生が江戸っ子の照れ隠しに、含羞を込めて強調されたのは、「バーゼル版のホルバインの挿絵を入れておいた。これはちょっとしたもんだぜ」ということでありました。

猛暑だった昨夏、病躯を押して孜々として二冊の大作の校正を並行して進められ、ついに完成されたことは、まったく壮烈なことで、最後までわれわれにあるべき学者の範を示されたのでした。

この岩波のご著書の最終章で、先生はこう録されています。「五〇年代はじめのパリ留学中の時期から、パリの南シュヴルーズの森にあるパスカルとゆかりの深いポール・ロワイヤルの修道院跡を、私は何度となく訪れた。どういうものか自分自身にもわからないが、そこが好きだったのである。あのジャンセニスムが

異端と断じられ、壮大な修道院の建物は夏草の茂る廃虚となっていた。今ではわずかに小さな聖堂だけがとりのこされている。家内とともに訪れるたびに、ただふたりの訪問客にものたりなそうな、しかしそれでも職務に忠実な案内の老人は、修道院の歴史を物語ってくれるのであった。パスカルは、私の年中歩いていたカルティエ・ラタンの、パンテオン脇の古い教会サン・テチエンヌ・デュ・モンの一角に眠っている。」奥様と共に最後にポール・ロワイヤル修道院跡を訪れて、長い間黙然と佇まれた後、「よし。これでよい。」と先生はそこを後にされた由。私にフト浮かんだ夢想に過ぎませんが、無教会的プロテスタントのご家庭に育たれ、松本正夫先生等の影響下でのカトリックを経て、このご著書で追究されたような探究の路を辿られつつ、先生はついに近代的科学者にしてジャンセニスト、パスカルに究極するような境地へと到り着かれたのでしょうか。あるいは、そうした境涯からもさらに自由になられたのでしょうか。いずれにせよ、先生は、早期のご高弟で、高野山の高位にあられる川島宏之師の住持される、江戸時代からの名刹、目黒の高福院境内に安らかに眠っておられます。境内高台の知夫さんの建立された大出家・大江家と二つ並ぶ墓碑の直ぐ背後には、先生の旧ご同僚やご高弟の方々が既に墓所を予約済みとか。幽明の境を越えて、既に新年会の続きのような賑やかな交わりが始まっているようです。

昨二〇〇四年の夏休みまえに、暑気払いに創価の人文学科中堅と一杯やりますかとお伺いをたてましたが、

いま校正の最中だからペースが狂うといけない、すべて終わってからにしよう、もっとも終わった後が心配だがな、と洩らされました。ご病気のことは全く知らなかったので、おやと思いつつも、では涼しくなってから秋に、と電話を置いたのです。秋になって京都での学会には行かれませんかとお電話すると、疲れが出ているから今度は見送る、ではもう少し後で出版のお祝いをしましょうということで、のびのびになり、寒いのはいけなから、暖かくなった春にしましょうか、などと暢気に構えておりました。電話口の先生の声には、いつものように張りがあり、相当にご病勢が進んでいたとは思いもよらなかったのです。ご逝去の翌日、奥様からのお電話に唖然とし、混乱して埒もないことを口走って妻に制されるほど、動転しました。いま考えると、何としてでも一度お訪ねすべきだった、お訪ねしたかったと切に思います。が、ダンディな先生は、われわれに弱られた姿を曝したくなかったのかもしれないとも思います。余りに忽然と昔のままの姿で去って行かれたので、私には未だに先生のご逝去が信じられないままなのです。

後に奥様から、「主人は本当に野本さんの人柄を愛し、学問を愛していた」と、身に余るお言葉を頂きました。長い間の暖かいご教導、励まし、ご配慮、本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。と同時に、自分のささやかな学問全体を理解し慈しんで下さる方は、もう日本にはいないのだという深い寂寥感に襲われます。

先生のみ魂に平安のありますように、御奥様、知夫さんの上に慰めのありますよう、切に祈ってやみません。（先生特愛というフォーレのレクイエム（アンドレ・クリュイタンス指揮、パリ音楽院管弦楽団）の響くなかで。）（二〇〇五・一二・一八）